



JICAロード沿いに流れる支線水路。スリランカ政府は1960年代にワラウェ川流域の開発を開始したが、右岸地域が先行し、左岸地域は取り残されていた。日本の支援により現在は、9,000ヘクタールの土地に約70の調整池ができ、総延長940キロにも及ぶ大小の水路が農地に水を送る



入植者のペマダオアさんは、かつて農地を持たない小作農だったが、新たな地で農業を始め、高品質のバナナや品種改良されたパパイヤを生産している。低い位置に実る改良種のおかげで、収穫作業の手間が減った



ワラウェ川に架かるJICA橋は右岸と左岸を結び、JICAロードへと続いている。住民の移動や農産物の輸送だけでなく、社会基盤整備が進む左岸に新築された学校へ机やいすを運搬するなどの役目も果たす

**未開のジャングルを  
黄金色の稲穂が実る  
水田に変えた農業開発**

収穫の時を迎えた水田は稲穂を海風にうねらせながら太陽のもと黄金色に輝いている。稻刈り作業を見守る農家が、開口一番に「ゾウが田んぼを荒らしてしまった」と、踏みつぶされた稲と、大きく陥没したゾウの足跡を指差した。それでも、収穫の喜びは溢れんばかりだ。「昔は本当に大変だった。水がない乾期には水牛の放牧をしていたんだ」。現在、水田の隣には、「ゾウの鼻の池」と名付けられた調整池が、水をたたえている。

スリランカ南部、インド洋に面したワラウェ川の左岸は、サファリのできる国立公園が隣接する地域だ。JICAがこの地で農業開発の調査を開始したのは1991年。当時この一

帶は、ゾウなどの野生動物が生息する、乾燥した未開のジャングルだった。人々は、雨期

に雨水を利用しながら、小規模な焼き畑農業で生計を立て、7ヶ月も続く乾期には農作物

生産は不可能という、気候に左右された不安定な生活を送っていたのだ。国内でも特に貧しいこの地域の開発は、スリランカ経済の発展においても大きな課題だった。

ジャングルが農村に変わる第一歩は、道路と橋の完成だ。幅の狭い未舗装道路は、雨期にはぬかるんで車が通れないこともあった。そして何より、わずか90メートル向こうのワラウェ川対岸へ渡る橋がなかつたため、住民は左岸から右岸へバスで4時間もかけて迂回していたのだ。93～95に行われた無償資金協力で完成した「JICA橋」が、右岸と左岸の交通を容易にし、ジャングルを貫くアスファルトの「JICAロード」31キロが、農

産物の運搬・食料の確保・教育・医療など、日常生活全般を大きく変えた。

同時に、円借款による灌漑改修拡張事業が、この乾燥地域に命の水をもたらすことになる。スリランカ政府マハウエリ開発庁を実施機関として、95年に始まったこの事業では、灌漑施設の改修拡張や農地造成を行い、さらに農家への営農技術指導によって、農業開発の促進を目指した。加えて、入植者支援として約

9000世帯の宅地造成を含め、学校や病院、電力供給などの社会基盤を整備し、地域全体の経済活性性までも視野に入れていた。

しかし、ジャングルを豊かな農村に変えるのは、そう簡単なことではない。

「当時、農業といえばコメ作りのイメージが強かつたんです。しかし、水田は水をたくさん使うことになる。水資源は限りがありますから、コメ以外の作物を奨励してきたのです



灌漑施設の改修拡張により、コメを年2回収穫できるようになった。農地へ水を引き込むための水路を水田用水路と畠地用水路に分けるなど、世界初の節水灌漑システムを構築。その結果、ワラウェ川左岸地域全体の農作物の売上高は、灌漑開始直後の約17.5倍にも達している

## 農民の夢を実現する 農業開発支援

文・写真= 谷本 美加 (写真家)

スリランカ南部の貧困地域、ワラウェ川左岸地域で、17年前、日本の支援による農業開発が始まった。道路や橋、灌漑施設の整備、農地造成、農業技術や農産物加工技術の指導などを行った結果、今や、コメ・果物・野菜を生産し、全国に出荷するほどの農業地帯へと変わりつつある。  
「暮らしをよくしたい」という農民たちの夢をかなえる農業開発の現場を訪ねた。

スリランカ

SRI LANKA

